

[テーマ]

本論文は現代のトンガ王国エウア島を事例に、きわめて頻繁におこなわれる寄付の要請とそれへの島民の対応をつうじて、彼らの内面的な価値意識を解明しようとした作品である。その分析概念には多義的なファントギア（正義、道徳、負担などをさす）をとりあげ、行政のおこなう寄付（ファカフォヌア）と教会が要請する寄付（ファカシアシ）に対する村人の反応のなかに、外的な生活圧や内的な道徳心を契機にする多様なファントギアの現代的な意味を明らかにする。

[方法]

それらは長期間におよぶ現地調査によって得られた資料に基づく分析で、記述の信憑性はきわめて高い。

[学術上の意義]

周知のようにトンガに関してはすでにかかなりの蓄積がある。しかし、それらはいずれもこの王国が換金作物の導入と海外出稼ぎによる社会変動の以前ないしはその直後に限られ、今日的な状況の記述には限界があった。

本論文は島民の寄付行為を介してそれを記述したものであり、短編ではあるもののこの点に研究上の意味が認められる。